

令和 元年 6 月 14 日現在

機関番号：35309

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K11636

研究課題名(和文) 治療と就労継続に必要ながん患者の調整力獲得プロセスを促進する看護援助モデルの開発

研究課題名(英文) Development of a nursing support model that promotes the process of acquiring adjustment ability necessary for cancer patients to continue treatment and work

研究代表者

廣川 恵子(Hirokawa, keiko)

川崎医療福祉大学・医療福祉学部・准教授

研究者番号：50446069

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：外来通院治療が必要ながん患者が復職し、治療と就労を継続していくプロセスにおいてどのような調整をしているのか明らかにした。

病期に関係なく仕事に対してどのような価値観を持っているかを再確認することを始点とするプロセスが明らかになった。自ら情報収集をしたり、職場に状況を説明したりしながら、職場や病院と協同して仕事や通院の仕方をカスタマイズしていた。復職後は、思い通りに働けないもどかしさを感じながらも、治療が優先だと意識することで折り合いをつけていた。周囲の人から配慮を受けながら関係性を発展させていた。がん患者は職場や病院と双方向的に多岐に渡る調整を行っていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

患者だけで模索してきた治療と就労の継続のための調整のプロセスが明らかにできた。特に継続治療を受けることに伴う身体的、社会的、経済的な負担を抱えるがん患者が、就労を継続するために必要な調整力を獲得し強化していくプロセスを理解し、調整力の獲得を促進する看護援助を明らかにすることは、治療の継続はもちろん患者が社会における役割を遂行できることによる生活の質の向上、ひいては経験豊富な人材という社会的資源の損失を最小限にすることにもなり、貢献できる。調整力に焦点を当てた看護援助を得ることによって、患者は調整力、自己効力感の向上を実感でき、主体的な生き方を選択していくことを促進していくという点で意義がある。

研究成果の概要(英文)：Revealed necessary adjustments to continue treatment after cancer patients return to work.

It became clear that the process started with reconfirming what value the patient had for work regardless of the stage. The patients worked with the office and hospital to customize their work and visits. The patient recognized that it was difficult to work as before, and told himself that treatment was a priority. The relationship with the surrounding people was developing. Cancer patients had been making various adjustments interactively with the workplace and the hospital.

研究分野：看護

キーワード：就労 治療 がん 患者

1. 研究開始当初の背景

高精度放射線治療の普及、内服抗がん剤の開発や支持療法の進歩、さらに診療報酬の改定に後押しされ、外来で継続的に治療を受ける患者数は増加した。一方、がん患者のうち、20～64歳の就労可能年齢でがん罹患した人は全体の32%（2008年）であり、サバイバーが増加していることを考え合わせると、治療と就労の継続が必要な状況におかれるがん患者は増加していくと言える。しかし、がんの診断後、勤務者の34%が依願退職または解雇、自営業者等の13%が廃業し、がん診断後の平均年収が診断前の42%に減少しているという現状であり、治療と就労を継続させることは容易ではない。外来化学療法を受けている患者のうち、仕事や家での用事といった役割の遂行が行えているものほどQOLが高いことが明らかにされていた（光井，山内，陶山，2009）。がん患者が経済的安定を得るだけでなく社会や家庭において役割を遂行できることは、QOLの向上に重要である。WHOはオタワ憲章で、人が健康を高め真の自由と幸福を得るためには、健康に関する知識や技術を身につけ実行する個人の力と、健康を支援する環境づくりの両方の重要性を示すヘルスプロモーションを提唱した。がん患者が治療と就労を継続させ健康を高めしていくためには、がん患者個人の力と環境づくりの両方へのアプローチが必要である。

外来で継続的な治療を受けているがん患者の生活は、通院に伴う身体的、社会的、経済的な負担などが複雑に絡み合った状況にあり、生活のあらゆる面を整えていく必要に迫られている。また、外来で継続治療を受ける患者の生活や就労条件は患者個々によって様々であり、しかも、病状、体調や治療内容の変化に応じた調整が複雑で長きに渡ることが多い。社会生活や日常生活を営みながら通院治療にかかる時間を定期的に確保するためには、役割を縮小して折り合いをつけることや他者へ部分的な役割を依存することは避けられず（堀井，小林，鈴木，2009）。申し訳なさを感じたり遠慮したりしながら休暇を取って治療を継続している（反町，石田，石田，他，2004）。就労しながら外来化学療法を受けている患者の役割遂行上の困難を経時的に明らかにした研究では、一貫して時間のやりくりが挙げられていた（田中，田中，2012）。外来がん患者が治療をしながら社会生活を継続させていく際に必要な調整力に焦点を当て、研究者が行った研究では、がん患者は多様な出来事や複雑な人間関係のなかで、調整する方法を模索したり、拠り所をつかんだりしながら、治療をしながら社会生活を継続させようとしていた。一方、がん患者は外来化学療法を受けながら就労を継続していく上で、周囲との調整に取り組んでいるものの多面的で豊富な手段ではないことが示されていた（和田，稲吉，2013；佐藤，吉田，前田，鷲見，2013）。しかし、がん患者が治療と就労を継続させていくために調整力を獲得していくプロセスや、調整力の獲得を促進する看護援助は未だ明らかにされていない。一方、がん患者の就労を支援する環境づくりとして、平成24年がん対策推進基本計画では、就労に関する問題への対処が重点的に取り組むべき課題として挙げられ、がんになっても安心して働き暮らせる社会の構築を目指し、就労に関する専門家の配置やがん診療連携拠点病院とハローワークとの連携が進められている。

2. 研究の目的

治療と就労の継続を目指す患者が調整力を獲得、向上させていくプロセスを明らかにし、調整力の獲得プロセスを促進する看護援助モデルを開発する。

3. 研究の方法

第1段階として就労継続しながら外来治療を受けるがん患者を対象としたインタビューを行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析し、調整力を獲得していくプロセスを質的に明らかにする。第2段階では、文献および外来治療をしながら就労を継続しているがん患者への看護を実践している看護師を対象としたグループインタビューから、第1段階で明らかにした調整力の獲得プロセスに沿った看護援助モデルの構成要素を明らかにし、看護援助モデル案を作成する。第3段階では、看護援助モデル案を洗練化する。

第1段階

研究対象者を次の(1)～(6)の条件をすべて満たす者とした。(1)20歳以上でがんの告知を受け、自身も認識している。(2)外来通院での治療が3ヶ月以上継続的に実施されることが予定されている。(3)治療と就労の継続を希望しており、1ヶ月以内に復職を予定している。(4)身体的、精神的な症状コントロールがはかれている。(5)研究協力への同意が得られている。(6)認知機能やコミュニケーション機能に障がいがない。

プレテストを経て洗練化したインタビューガイドを用いて、半構成的面接を第1回（復職予定1週間～1ヶ月前）、第2回（復職後1ヶ月前後）、第3回（復職後3ヶ月前後）の3時点でもしくはこのうちの2時点で縦断的に行った。第2回および第3回の協力者は、その時点で治療と就労を継続できている者とした。

分析焦点者は「治療を継続しながら復職するがん患者」とした。分析テーマを「治療を継続しながら復職するがん患者が、治療と仕事を継続していくプロセス」とした。本研究において「復職」を、がん治療のために、休職・退職していた人が再び職に就くことと定義した。

逐語録の内容をデータとして、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法を用い

て分析した。

4．研究成果

治療を継続しながら復職するがん患者 10 名から協力を得ることができた。

治療と就労の継続を目指す患者が調整力を獲得、向上させていくプロセスは、病期に関係なく仕事に対してどのような価値観を持っているかを再確認することが始点となっていた。そしてその思いが治療と就労を継続していこうとする者としての役割を果たすことに繋がっていた。その役割を果たそうとする行動によって、職場から有益な支援を受けることができていた。そして、自分の状況にあった仕事や通院の仕方を、職場や病院と協同してカスタマイズしていた。復職してからは、これまでになかった仕事の仕方をしていくことになる。その中で、思い通りに働けないもどかしさと治療が優先だという気持ちの折り合いをつけていた。治療の経過やスケジュールから、今後どのような調整が必要か考えていく。このようなプロセスにおいて周囲の人からのありがたい配慮を感じるとともに、過剰な気遣いに対しては、周囲の人の気持ちを押し測りながら、関係性を発展させていた。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

廣川恵子, 渡辺陽子, 大石昌美, 平松貴子, 山下絹代: 外来通院治療と就労を継続するがん患者の調整. 日本がん看護学会第 32 回学術集会, 2018

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名: 鈴木 志津枝

ローマ字氏名: Suzuki Shizue

所属研究機関名: 神戸市看護大学

部局名: 看護学部

職名: 教授

研究者番号 (8 桁): 00149709

研究分担者氏名: 井口 悦子

ローマ字氏名: Inokuchi Etsuko

所属研究機関名: 活水女子大学

部局名: 看護学部

職名：准教授

研究者番号(8桁): 20363476

(2)研究協力者

研究協力者氏名：渡辺 陽子

ローマ字氏名：Watanabe Yoko

研究協力者氏名：平松 貴子

ローマ字氏名：Hiramatsu Takako

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。